出現・奇跡・奉納
――西欧カトリック社会における奉納をめぐる宗教システム――

岩　井　　洋

はじめに

本稿の目的は、西欧のカトリック社会（カトリック信者が大多数を占める地域）における「エクス・ヴォート」（ex-voto）と呼ばれる奉納物に焦点をあて、聖母マリアの出現と奇跡、奇跡に対する感謝の奉納、そして巡礼地の形成といった一連の流れを支えるメカニズムについて考察することである。

従来の研究では、聖母マリアの出現と奇跡、奉納習俗、巡礼などのテーマが、ある程度関連づけられながらも、個別の研究テーマとしてあつかわれてきた傾向があり、全体を総合化・図式化する研究はあまり展開してこなかったといえる。とりわけエクス・ヴォートについては、民俗学や歴史学をのぞき、宗教学あるいは宗教社会学の資料としてあつかわれることが少なかった。

そこで本稿では、聖母マリアの出現と奇跡、奉納習俗、巡礼といった一連のプロセスを支えるメカニズムを考察し、総合化・図式化することをめざしたい。具体的な考察の手順としては、第一に、聖母崇拝、聖母の出現と奇跡について考察する。第二に、西欧のカトリック社会におけるエクス・ヴォートについて、その歴史的展開と奉納習俗について考察する。その際、比較研究のために、日本における絵馬の奉納習俗についても言及する。第三に、聖母マリアの巡礼地であるドイツ・アルトエッティング（Altötting）の事例を紹介し、最後に、聖母マリアの出現と奇跡、奉納習俗、巡礼のプロセス全体を総合的にとらえる視点を提示する[1]。

1．聖母の出現と奇跡

議論を進めるにあたり、まずカトリックにおける聖母マリア[2]の位置づけについて簡単に確認しておく。

聖母マリアは、イエス・キリストの母としてあがめられる存在であり、「原罪」（人間が生まれながらに負う罪）を最初から免れて生まれてきた「無原罪」の存在とされている。また、聖母マリアは、地上での生涯の終わりにその霊魂が肉体とともに天国に昇天したとされ、これを「聖母被昇天」という。さらに、その出来事を記念する祝日を8月15日（聖母被昇天の

祝日）としている。カトリックの教義では、「崇拝」（adoratio）の対象は神のみであり、聖母や聖人はあくまでも「崇敬」（veneratio）の対象であるとされ、神と人間を「仲介」するのが聖母や聖人であるとされる。したがって、奇跡をもたらすのは神のみであり、聖母や聖人は奇跡の「仲介者」にすぎない。

しかし、これらの理屈が一般庶民のあいだで「腑に落ちる」ものとして浸透してきたとは考えづらく、そのことは後述するエクス・ヴォートの奉納習俗をみれば理解できる。人々は聖母や聖人を身近な存在としてイメージし、奇跡や（日本的な言い方をすれば）御利益を得ようとし、聖母や聖人に対して「崇拝」や「信仰」とも呼べる態度を示していたことは、多くの歴史研究[3]が明らかにしている。したがって、以下、本稿では分析概念として「聖母崇拝」「聖人崇拝」という用語を使用する。また、（カトリックにかぎったことではないが）公式の教義を人々が解釈しなおし、教義から「ずれ」が発生していく過程で、「民俗宗教」（folk religion）や「民衆宗教」（popular religion）と呼ばれる宗教現象が生みだされていく[4]。

1.1　聖母の出現

このような文脈のなかで、人々が聖母マリアを身近に感じ、救いを得たいという欲求が「聖母の出現」（Marian apparition）[5]という語りとなってあらわれる。聖母の出現とは、聖母マリアが人々の前に現れたとされる出来事をさす。そして、多くの場合、聖母マリアから何らかのメッセージが伝えられ、やがて病気の治癒をはじめとする様々な奇跡がおこったと報告されている。古くは1世紀前半にスペインのサラゴサでヤコブの前に現れたと伝えられる「ピラールの聖母」（Nuestra Señora del Pilar）にはじまり、現在にいたるまで、おびただしい数の事例が世界中で報告されている[6]。

しかし、ヴァチカン（ローマ教皇庁）が承認した聖母の出現は、1531年のグアダルーペ（メキシコ）から1981年のキベホ（ルワンダ）にいたるまで、わずか16件にすぎない。聖母出現の歴史を考える際に興味深いのは、19世紀から20世紀にかけて、「マリアの世紀」や「マリアの時代」と呼ばれるほどに、世界各地で聖母の出現が報告されたことである。フランスに限ってみただけでも、1830年のバック街（Rue du Bac）、1846年のラ・サレット（La Salette）、1858年のルルド（Lourdes）、1871年のポンマン（Pontmain）などがあげられる。これ以外にも、1917年のポルトガル・ファティマ（Fátima）、1932年のベルギー・ボーラン（Beauraing）、1932年のベルギー・バンヌー（Banneux）などを含め、1830年から1933年までのおよそ100年間に11件の聖母の出現が報告され、いずれもヴァチカンに承認された16件に含まれる。

これらの事例にある程度共通する特徴は、聖母マリアが子どもたちの前に出現するということである。たとえば、ラ・サレットでは二人の牛飼いの子ども、ルルドでは14歳の娘、ポンマンでは数人の子どもたち、ファティマでは三人の羊飼いの子ども、などが聖母の出現

を体験している。さらに興味深いのは、ルルドでは「何か白いもの」、ポンマンでは「蒼い服の女性」などと子どもたちが最初に見たものを表現したように、のちに「聖母の出現」として語られるものは、当初「聖母」として明確に認識されていなかったことである。関[7]は、ラ・サレット、ルルド、ポンマンなどの事例を取り上げ、聖母の出現に立ち会った神秘体験者とそれを取り巻く群衆や教会を「見者」と「群れ」の関係としてとらえている。そのうえで、両者の相互作用を通して、当初は「聖母」として認識されていなかったものが、いかにして「聖母」として語られはじめ、人々のあいだで「聖母の出現」という「事実」[8]として定着したのかを丹念に分析している。

1.2　近代と聖母出現

また関は、「ポルター―ガイスト」（Poltergeist）現象と呼ばれる心霊現象を契機とする近代スピリチュアリズムの発生•興隆と、ほぼ同じ時期におこった一連の聖母出現と奇跡の「同時代性」に着目し、両者から読み取れる共通項は「いわゆる教会聖職者や宗教的職能者による限定された媒介をはなれた、大衆的状況での他界との交信のこころみ」[9]であるという。このことは、教会などの制度的枠組にとらわれない民衆的宗教性が、近代スピリチュアリズムあるいは聖母出現と奇跡という現象を通じてあらわれてきた、と読みかえてもよい。もちろん、聖母出現と奇跡という現象は、民衆的宗教性に支えられながらも、教会の規制からまったく自由であったわけではない。

19 世紀における聖母出現と奇跡の広がりについて考える際、関が指摘するように、飛躍的な発展をみせた社会技術史上の諸発明にも目配りする必要がある。具体的には、鉄道の発達と聖地巡礼、写真、印刷、彫塑などの複製技術である[10]。たとえば、ルルドで聖母出現を体験したベルナデット・スビルー（Bernadette Soubirous, 1844-79）[11]の写真[12]が残されているだけではなく、聖母出現の場面を再現した絵葉書なども作成され、それらが流布することは、ルルドへの信仰が広がることに寄与したといえる[13]。また、1830 年にバック街の「奇跡のメダイユ教会」（Chapelle Notre-Dame de la Médaille Miraculeuse）で聖母出現を体験した修道女カトリーヌ・ラブレ（Catherine Labouré, 1807-76）（のちに聖人）は、聖母マリアに聖母像のメダルを鋳造するように告げられた。メダルが鋳造頒布されると、当時パリに流行しはじめていたコレラから身を守るものとして人々に受け入れられ、その後、メダルが量産され、流布しはじめると、メダルにより様々な奇跡がおこったとの報告が多く寄せられるようになった[14]。

このような複製技術と信仰の広がりとの関係は、後述のエクス・ヴォートや巡礼地の形成について考察する際にも重要となる。また、このことは「複製と増殖」[15]という観点から宗教現象をとらえる可能性を示唆している。

1.3　黒い聖母

さて、聖母崇拝について語るときに忘れることができないのは、「黒い聖母」[16]の存在である。現在、聖母マリアの肌の色をあらためて意識するカトリック信者は多くないと考えられるが、古来、肌の色が黒い聖母マリアは奇跡を多く生むものとして信仰をあつめ、黒い聖母子像やその伝承は、西欧に広く分布している[17]。ちなみに、のちにふれるドイツ・アルトエッティングの聖母子像も黒い肌をしている。

ベッグは、世界の黒い聖母像が安置されている場所、あるいは黒い聖母の伝承がある場所等を調査し、約500件にのぼる事例を紹介している。そのうちの302件はフランスのものであり、次いで多いのはスペインの55件である。また、西欧のものについては、フランスのミシュラン（Michelin）社の地図上に所在地をマッピングしている[18]。これらをみると、黒い聖母に対する信仰の広範な広がりがよく理解できる。また、各項目には、当地の黒い聖母子像が、他のどの教会の聖母子像を模したものかについても記述されており、前述の「複製と増殖」という観点から聖母崇拝を考える重要なヒントとなる。

なぜ「黒い」聖母が崇拝されてきたのかについては諸説あるが、山形[19]がまとめているように、おおむね三つの説が考えられる。

ひとつは、マグダラのマリアに、黒い肌として表現されることの多い古代オリエントの地母神や、「黒」を象徴する魔女のイメージが押しつけられて、黒い聖母のイメージができあがったとの説である。マグダラのマリアは、イエス・キリストの処刑に立ち会い、その復活の目撃者となった女性である。しかし、聖書のなかでは、彼女は娼婦や「罪ある女」として描かれており、男性優位の教会の基盤を揺るがしかねない危険な存在と考えられたため、負の「黒い」イメージを教会から押しつけられたという。

二つ目の説は、黒い聖母のルーツを古代オリエントの女神イシスをはじめする大地母神に求めるものである。黒は西欧キリスト教では不吉・不浄を意味するが、古代オリエントにおいて、黒い肌をもつ女神は、豊穣や多産の母神として信仰をあつめた。小アジアの地母神キュベレ、シリアの大地母神アルテミスやアシュタロテなども黒い肌の女神である。柳[20]は、疫病、戦争、貧困といった社会的混乱が、人々を神秘主義的なものに駆りたて、その結果が黒い聖母の崇拝であるという。

三つ目の説は、古代ケルトの地母神に黒い聖母のルーツを求める説である。田中[21]は、父権的キリスト教の男性優位の原理と古代ケルトの母性原理を対比させ、前者が後者を排除してきたという。そして、キリスト教の歴史のなかで、古代ケルトの黒い地母神は異端の神として排除されてきたが、様々な社会的混乱のなかで母性原理にもとづく地母神が人々をひきつけ、キリスト教と地母神が習合することで黒い聖母ができあがったという。

いずれの説をとるにせよ、キリスト教以前から脈々と流れる母性原理にもとづく地母神信仰が、キリスト教と習合し、地母神のイメージが聖母マリアに投影されたと考えられる。こ

の黒い聖母に対する崇拝は、西欧のおける聖母崇拝の広がりに大きく作用したといえる。

2．エクス・ヴォート：カトリックにおける奉納習俗

次に、西欧の聖母•聖人崇拝において、聖母•聖人がおこしたと信じられる奇跡に対する、感謝のしるしとして奉納される「エクス・ヴォート」(ex-voto)[22]について考察する。

エクス・ヴォートという言葉は、「誓願成就により」というラテン語 ex voto suscepto の縮約形に由来する[23]。信者は、病気や事故をはじめとする、何らかの危機的状況に遭遇した際、超越的存在に対して祈り、その願いが成就した感謝のしるしとして、様々な奉納物をおさめる。この奉納物の総称を「エクス・ヴォート」という。

2.1　エクス・ヴォートの研究史

本題にはいる前に、エクス・ヴォートの研究史について簡単にふれておく。ここでは、近年のウェインリブの概説[24]を参考にする。

物質文化[25]としてのエクス・ヴォートの研究は、人類学、民俗学、考古学や美術史の結節点として研究されてきた。また、宗教的建造物は美術史や建築史の研究対象であることから、それに付随する様々な奉納物も対象となってきた。水野[26]によると、エクス・ヴォートを美術史学的にとりあげた嚆矢は、アビ・ヴァールブルクの論文「肖像芸術とフィレンツェの市民階級」(1902 年)[27]であるという。

その後、ドイツでは、1904 年に地理学・民族学者のアンドレーによる先駆的な著書[28]が刊行されるが、エクス・ヴォートは巡礼地のバッジや土産物のように、護符やお守りと同等にあつかわれていた。当時、エクス・ヴォートは迷信にもとづく民間信仰としてとらえられていた。ルドルフ・クリスとレンツ・クリス＝レッテンベック[29]の父子は、のちにミュンヘンのバイエルン国立博物館（Bayerisches Nationalmuseum）に所蔵されることになる膨大な数のエクス・ヴォートを収集するとともに、エクス・ヴォート研究をすすめた。しかし、その研究も、アンドレー同様、エクス・ヴォートを呪術的なものとしてとらえていた。

一方フランスでは、1920 年代から、歴史学における「アナール学派」(L'école des Annales)[30]が、「心性」(mentalité）の歴史を明らかにする資料としてエクス・ヴォートを活用し、中世の民衆宗教の研究を展開した。

時代が下がって、フリードバーグ [31]は、著書 *The Power of Images* において、エクス・ヴォートに 1 章を割き、人間と超自然的存在との交流を図像学的に読み解いている。また、比較的最近の研究成果としては、松平と蔵持[32]のものがあげられる。松平らは、南仏マルセイユのノートル＝ダム・ド・ラ・ギャルド大聖堂（Basilique Notre-Dame de la Garde）に奉納されたエクス・ヴォートを詳細に分析し、エクス・ヴォートの造形表現や造形物を通

して、カトリック圏の民衆文化について考察している。さらには、ウェインリブの編集によるエクス・ヴォート研究の論文集[33]がある。この論文集では、古代から現代まで、またヨーロッパから（日本を含む）アジアにいたる様々な時代や地域の奉納習俗について論じられ、エクス・ヴォートをめぐる問題群を概観できる。

2.2　エクス・ヴォートの起源と歴史

次に、エクス・ヴォートの起源と歴史について概観する。エクス・ヴォートの起源は、身体の部分をかたどったテラコッタ（terra cotta　褐色がかった橙色の素焼）に求めることができる。カッサール[34]によると、マルタ島から新石器時代の粘土や石灰で作られた身体の部分をかたどった奉納物が出土している。これらは、病気が治癒した感謝のしるしとして、神々の神殿に奉納されたものと考えられる。また、少し時代が下ると、ペロポネソス半島のエピダウロスを中心として展開したアスクレピオス（Asklepios ギリシャ神話の医神）崇拝の中にも、身体の部分をかたどった金属製の奉納物をみることができる[35]。これらの奉納物は、身体をかたどった蝋細工や金属の打ち抜きという形態で、現在でもカトリック社会に広くみられる。

11 世紀以降、蝋がエクス・ヴォートの材料として使われはじめ、13、14 世紀にはヨーロッパ中に普及した[36]。また 13 世紀末以降、裕福な信者のあいだでは、信者と等身大あるいは同じ重さの蝋人形が頻繁に奉納されるようになり、14 世紀には、銀製の小像や身体の部位をかたどったエクス・ヴォートが流行したという。さらに、礼拝堂は一種のギャラリーの役割を果たし、材質が高価で大型のエクス・ヴォートは、奉納した信者の社会的地位を誇示するのに役立ったと考えられる[37]。

一方、奉納画としてのエクス・ヴォートは、15 世紀半ばにイタリア中部に登場したとされる。当初は富裕層による信仰と感謝のしるしとして奉納されたと考えられるが、16 世紀以降は、聖母崇拝の広がりとともにイタリア全土へと広がり、17 世紀には、奉納画の習俗が広い社会階層に拡大するとともに、全西欧に普及したとされる[38]。奉納画としてのエクス・ヴォートは、身体の部分をかたどったテラコッタや蝋細工、金属の打ち抜きなどの形態から派生したものと考えられる。このことは、病気からの回復に対する感謝の表現として、眼や手足などをそのまま図像化したエクス・ヴォート[39]をみると明らかである。以下、本稿では、奉納画という形態に限定してエクス・ヴォートという用語を使う。

エクス・ヴォートには、貴族や富裕層が有名な画家に描かせたものもあるが、多くの場合、巡礼地の奉納画家や各地を放浪していた無名の画家によって描かれ[40]、家具師、建具職、額縁屋、絵具屋などが副業としてエクス・ヴォートを描く場合もあった[41]。貴族や富裕層によって奉納された大型のものを除けば、エクス・ヴォートの多くは、30 ～ 40 センチ四方程度の小型の木の板に描かれたものである。

2.3　エクス・ヴォートにみる図像表現

では、エクス・ヴォートの図像表現について考察する。クリス＝レッテンベックによれば、一般にエクス・ヴォートは以下の４つの構成要素からなる。⑴ 奇跡を起こす聖人・聖母の像や聖なる場所などの超自然的な力の表示、⑵ 天界を向き、祈る人物の描写、⑶ 地上の人物を超自然的な人物あるいはシンボルとのコミュニケーションの発端となった出来事や状況、⑷ 状況、出来事や希望を記した銘文[42]。

実際には、これらの要素が複数組み合わされたり、一部が欠落したりしている場合もあるが、エクス・ヴォートの基本的な図像構成は三つの部分からなる。すなわち、天空に後光を浴びて（あるいは雲の中に）現れる聖母・聖人の姿、奉納者が直面した危機的状況などを表す絵、そしてそれに関する文字情報である（文字情報のない場合もある）。これらを図式化すると、図１のようになる。

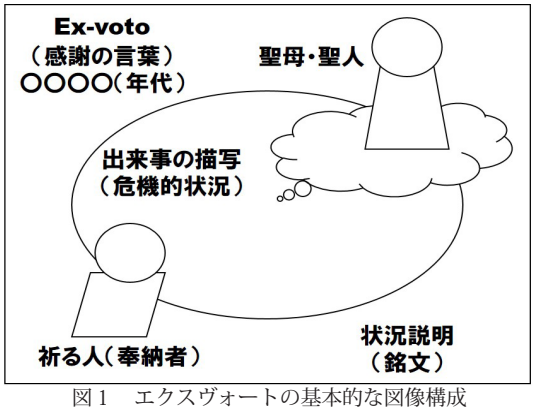


図１　エクスヴォートの基本的な図像構成

エクス・ヴォートの図像表現で特徴的なことは、絵画表現の巧拙に差はみられるものの、奉納者が直面した危機的状況が直截かつ詳細に描写されていることである。このことは、のちにふれる日本の絵馬にみられる図像表現とは対照的である。

エクス・ヴォートにみる祈願内容の多くは個人的なものであり、伝染病や火災、水害といった共同体に関わるものには、共同感謝のエクス・ヴォートもみられる。文字情報の中には、EX VOTO といった文字や、「祈願し、恩恵にあずかりました」という意味の VFGA あるいは FGVA（votum fecit gratiam acceptit）、同様に PGR あるいは GR（per gratia ricervuta）、MGF（milagro que fez）などの決まり文句が含まれていることが多い。

エクス・ヴォートの画題としては、先行研究[43]を総合すると、以下のように分類することができるが、その内容は多岐にわたる。

（1）病気（身体各部の病気、ペストやジフテリアなどの伝染病など）、（2）出産、（3）子供の保護、（4）死、（5）家畜の病気、（6）交通事故（馬車、列車、自動車）、（7）水難（洪水、海難など）、（8）火事、（9）作業中の事故（土木作業、井戸掘り、狩猟など）、（10）戦争（戦争からの生還、捕虜収容所からの生還、空襲など）（11）祈る人（個々の祈願内容は銘文の中）、（12）その他（国家試験合格、強盗、両親からの結婚許可など）

さて、エクス・ヴォートの図像から明らかになるのは、奉納者と聖母・聖人との関係性であ

る。奉納されたエクス・ヴォートにみられる超自然的存在は、ほとんどの場合が聖母・聖人であり、イエス・キリストが表現されていることは少ない。このことは何を意味するのか。

前述のように、カトリックの教義によれば、奇跡は神のみによってもたらされ、聖母・聖人は神と人間を「仲介」する存在とされている。したがって、エクス・ヴォートにみられる感謝の言葉は、理念的には、神と聖母・聖人の「仲介」に向けられたものと理解することができる。しかし、実際の宗教実践をみるならば、人々は聖母・聖人を直接の崇拝対象としてきたことは明確である。たとえば、現存するエクス・ヴォートの銘文をみても、「聖母マリア（あるいは聖人の名前）様、助けていただいてありがとうございます」という文言を、多く目にすることができる。

エクス・ヴォートの奉納が一般化したと考えられる17世紀以降、カトリック教会が提示する教説を、一般庶民が正確に理解し、それに沿った宗教実践をしてきたとは考えにくい。聖母・聖人は、人々が苦難や危機に瀕したときにすがるべき救済のチャンネルとして存在してきたといえる[44]。また、火災よけ（聖フロリアヌス）、紛失物探し（パドヴァの聖アントニオ）、自動車の事故よけ（聖クリストフォルス）、眼病治療（聖ルチア）といったように、聖人に応じて祈願に対する加護機能の分担があり、人々にとっての聖人は、遥か彼方の存在というよりは、日常生活のあれこれの問題に応えてくれる身近な存在であったとみたほうがよい。

さて、エクス・ヴォートの現代的な形態として、交通事故の写真[45]や新聞記事をそのまま額に入れたものや、刺繍で感謝の文字を綴ったもの、大理石板にDankeやMerciといった感謝の言葉を刻んだ、簡略化されたものもみられる。クザン[46]は、19世紀に従来のエクス・ヴォートが大理石板にとってかわられたという。ウィルソン[47]も同様に、1880年代と1890年代を「エクス・ヴォートの現代的形態」への転換期と位置づけている。

2.4 日本の絵馬とエクス・ヴォートの比較

ここで、比較研究のために日本の絵馬[48]について簡単にふれておきたい。

一般に「絵馬」とは、神社仏閣に奉納された板絵を意味するが、その起源は、その字が示すように、生馬の献上にあったとされる。このことは、神霊が馬に乗って降臨するという伝承と関連があり、神の乗り物として生馬が献上されたと考えられる。『常陸国風土記』や『続日本紀』をはじめとする多くの文献にも、神馬の献上についての記事がみられる。さらに、雨乞儀礼においては黒毛の馬、日乞儀礼においては白毛の馬が献上されていたとされる。これは、雨雲＝黒、太陽＝白という、色による呪術的効果によるものと推測される。生馬の献上とは別に、土製や木製の馬型を献上する習俗も生まれた。これは、生馬を献上できなかった際の代替物であると考えられる。

現在の絵馬のような板絵に関しては、難波長柄豊碕宮跡（大阪市中央区）から出土したも

のが最古とされている（7 世紀半ば）。室町時代までの絵馬については、実物がほとんど現存しないが、『年中行事絵巻』や『春日権現験記絵巻』では、黒毛の馬と白毛の馬の図が、二枚一組で奉納されたものが描かれており、生馬献上にみられた雨乞と日乞の習俗が、そのまま板絵の奉納習俗にも継承されていることがわかる。

室町時代中期になると、絵馬は画題と形状の面で大きく変化し、馬だけではなく様々なものが描かれるようになる。また、形状も横長の長方形のものから、上辺に丸みを帯びたもの、扇面型などの変形の絵馬も登場した。さらに大きさにおいても、漸次大型化する傾向がみられた。大型化した絵馬はやがて扁額形式になり、桃山時代には、上級武士や商人たちによって豪華な絵馬が奉納されるようになった。これらの中には、高名な絵師たちが筆をふるったものも多かった。絵馬が大型化し扁額形式になり、絵馬の奉納がさかんになるにつれ、絵馬をかけるための絵馬堂が各所に建立されるようになり、絵馬堂は一種の「ギャラリー」の機能を果たすようになった。このことは、前述の礼拝堂がエクス・ヴォートのギャラリーの役割を果たしたことと同じである。絵馬堂の登場によって、「算額」と呼ばれる数学絵馬もかけられるようになった。これは、江戸時代以降に発達した「和算」（日本式の数学）を背景としたもので、自作の数学問題を絵馬としてかかげ、その問題を解いた者が、さらに解答を絵馬としてかかげる、というものである。ここには、絵馬堂を通した参拝者同士のコミュニケーションが成立していた。

近世以降に大型化した絵馬、すなわち「大絵馬」とは別に、中世までの小型で吊懸形式の絵馬、すなわち「小絵馬」は、庶民のあいだで受け継がれた。小絵馬には、民間信仰の要素が色濃く反映されている。神仏を明確に区別しなかった庶民の信仰形態は、画題の多様化を促進したと考えられる。つまり、信仰対象が多様化することにより、その信仰対象に関連する画題も多様化することになる。

エクス・ヴォートと日本の絵馬を比較した場合、大きな違いが二つある。ひとつは奉納形態の違いであり、前者は感謝の奉納、後者は祈願の奉納にウェイトがおかれている点である。いまひとつは、図像表現の違いである。すなわち、前述のように、エクス・ヴォートは感謝内容についての直裁かつ詳細な表現をとるのに対して、絵馬は直裁な表現をとらず、むしろ「判じ絵」や「謎解き」の要素をもっている点である。

たとえば、「心に錠」という画題（「心」という字に錠前をかけた図）は配偶者の浮気封じを祈願したものだが、「ピンと心に錠前おろし、どんな鍵でもあきはせぬ」という歌が江戸時代の末に流行したことによって普及した。興味深いのは、このモチーフを利用した絵馬が次々に登場したことである。すなわち、「盃に錠」（＝断酒）、「煙管に錠」（＝禁煙）、「賽に錠」（＝博打封じ）などである。また、「縁切り」（背中合わせの男女を描いた図）というモチーフにも、「縁を切る」という意味が多様に解釈され、情婦・情夫との手切れ、病気との絶縁などにも使われるようになった。さらに、軍服姿の男性と背中合わせに座る女性の図像は、「兵役逃

れ」の祈願のために奉納された。これは、兵役逃れを公然と祈願できない状況にあって、男女の「縁切り」というモチーフを利用して、その祈願を秘かに図像に込めたものである。このように、絵馬の図像表現には、語呂合わせのような言葉遊びや比喩、デザインによる遊びなどの要素がみられる。

3．ドイツ・アルトエッティングにみる巡礼地の形成

ここまで、聖母マリアの出現と奇跡、エクス・ヴォートの奉納習俗について述べてきたが、最後に、ドイツ・アルトエッティング（Altötting）[49]の事例を紹介し、聖母マリアの出現と奇跡、エクス・ヴォートの奉納習俗、巡礼地の形成という、一連のプロセスについて考察する。

3.1　アルトエッティングのエクス・ヴォート

アルトエッティングはドイツ最大の聖母マリアの巡礼地で、ドイツ南部のバイエルン州アルトエッティング郡にある小都市である。ミュンヘンから東に約 100km に位置し、オーストリア国境に接している。同市の人口は約 1 万 2,000 人であるが、聖母マリア像を安置した礼拝堂（Gnadenkapelle）を擁することから、年間約 100 万人の巡礼者が訪れる。

同礼拝堂には、1330 年の作とされる、菩提樹の木を彫った黒い聖母子像が安置されている。この聖母による最初の奇跡は、1489 年におこったとされている。それは、川で溺死した子どもを母親が礼拝堂に運び、聖母に祈ったことにより子どもが蘇生した、というものである。この出来事以来、大公や皇帝はもとより聖職者や貴族、一般市民にいたるまで、巡礼者がおしよせたという。

しかし、16 世紀の宗教改革により、西欧全般に、聖母マリアの聖地への巡礼は一時衰えをみせた。ルター、カルヴァン、ツヴィングリなどの宗教改革者のあいだでも、聖母マリアに対する考え方は一様ではなかったが、「崇拝」あるいは「信仰」ともいえる聖母マリアに対する信者の態度に対して、プロテスタント側は警戒心を示していた。紫垣[50]によると、アルトエッティングでも巡礼者の喜捨による収入が、1492 年には 13,000 グルデン（金貨の単位）以上にのぼっていたものが、1560 年には 79 グルデンにまで落ち込んだという[51]。その後、大公ヴィルヘルム 5 世による巡礼政策、とりわけアルトエッティングをカトリック改革の拠点とする政策や、4 年に 1 回の巡礼を会員に義務づけたマリア信心会の創設などは、聖母マリアの聖地としてのアルトエッティングの活性化に寄与したと考えられる。また、17 世紀、マクシミリアン 1 世の時代には、カトリック帝国諸侯がアルトエッティングに参集するなど、当地がドイツ全土のカトリックの集合地点となったという[52]。

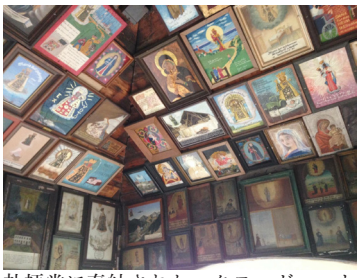
聖母子像を安置した八角形の礼拝堂の回廊の壁面や天井には、現在、数千ものエクス・

ヴォートが奉納されている。そのなかでも現存する最古のエクス・ヴォートは、1501 年に奉納されたもので、ドイツ地域でもかなり古い部類に入る。このエクス・ヴォートには、ベッドに横たわる男性とそれを見守る家族、そして男性のすぐ横に聖母子が後光をあびて現れている姿が描写されている。絵の下には、病気の治癒を示す奇跡譚が記されている[53]。これ以外にも、回廊には、身体の部分をかたどった蝋型がガラスケースに入れられて展示されている。

バウアー[54]によると、1967 年にすべてのエクス・ヴォートを整理しなおしたという。当時、1501 年の最古のもの以外にも、1518 年にパッサウ（バイエルン州の都市）から奉納されたものが 1 点、17 世紀のものが 49 点、18 世紀のものが 43 点、19 世紀のものが 1427 点、20 世紀のものが約 400 点など、あわせて約 2,000 点が記録されていた。1700 年には礼拝堂の回廊がエクス・ヴォートで埋め尽くされ、それでも 1892 年から翌年にかけて、さらに約 3,000 点が奉納されたという。しかし、そのうちの何千点かが散逸・破損し、なかには奇跡の証として売却されたものもあったという[55]。また、フリードバーグ[56]によると、1656 年から 1693 年のあいだに、12,450 点以上のエクス・ヴォートがアルトエッティングに奉納されたという[57]。これらのおびただしいエクス・ヴォートの奉納数は、聖母マリアに対する人々の信仰の篤さをあらわすものといえる。

アルトエッティングの礼拝堂

礼拝堂の回廊


礼拝堂に奉納されたエクス・ヴォート

3.2　エクス・ヴォートと奇跡集

次に、アルトエッティングにおける聖母マリアによる奇跡、エクス・ヴォートの奉納、そして巡礼地の形成、という流れがわかる伝承を紹介する。それは、トーマス・ハンスという学生が、車轢きの刑に耐えて生きのびたという奇跡譚であり、その物語は、17 世紀に奉納されたエクス・ヴォートに記されている[58]。

トーマスは、学業を修めた後、自堕落な人生を歩み、ついには殺人を犯してした上に、司祭にも短刀で重傷を負わせてしまう。彼は、逃亡中、聖母マリアの力を感じ、魂が救われるのなら自首することを誓う。自首したトーマスは、獄中でアルトエッティングの聖母が起こした奇跡譚を集めた「奇跡集」（Mirakelbuch）を入手し、死刑執行にもかかわらず生きのびた人間の奇跡譚に出会う。そこで、もし生きながらえたらアルトエッティングへ巡礼し、土曜日には一生断食を続けると誓う。

1663年6月に判決が下り、7月27日、トーマスは車轢きの刑に処せられた。刑を執行するにあたり、近隣の聖職者が集められ、トーマスのために祈りが続けられたが、その中には、当のトーマスに重傷を負わされた司祭の顔もあった。彼によると、自分が助かったのは、パドヴァの聖アントニオに助けを請うたからであるという。さて、刑が執行され、通常ならば身体がバラバラになるような責め苦を負うにもかかわらず、奇跡的にトーマスは左下肢の骨折だけですんだ。聖職者や当局者は、罪人が死んだものと思い刑場を立ち去ったが、刑の一時間半後、トーマスはある修道士に助けられた。数ヶ月後、トーマスは恩赦により釈放された。

この出来事は直ちに人々のあいだで話題になり、聖母の奇跡として伝えられるようになった。やがて、アルトエッティングの教会当局は、この出来事に大きな関心を示し、「奇跡」を描いた大型のエクス・ヴォートを注文した。トーマスは教会から報酬を受け、アルトエッティングの聖母の奇跡に関わる生き証人として、しばらく当地に暮らしたという。なお、1664年、つまり「奇跡」の翌年には、トーマスについての調書や関係者の証言、サインなどを記載した奇跡集が出版されている。

奇跡譚と巡礼地の成立について考える際に重要なのは、「奇跡集」とエクス・ヴォートの存在である。トーマスが獄中で出会った奇跡集は、彼自身の奇跡につながり、さらにそれが奇跡集として出版されるという連鎖がみられる。奇跡集は、聖母・聖人の奇跡を宣伝するメディアとして活用され、各地を巡回していた修道士たちによって、数え切れないほどの奇跡譚が広められた[59]。奇跡集は、部位ごとの病気の治癒など、テーマごとに編集されており、どの教会のどの聖母・聖人が、どのような奇跡を起こしたのかについて詳細に記されていた。それは、いわば「御利益のカタログ」か「御利益のガイドブック」といった様相を呈していた[60]。

エクス・ヴォートについても、奇跡集と同様に、奇跡の宣伝に役立った。前述のように、教会当局はトーマスの奇跡を受けて、大型のエクス・ヴォートを注文しているが、これは、礼拝堂にかけられたエクス・ヴォートが、そのまま教会の宣伝に役立ったからである。アルトエッティングでも、礼拝堂はいわば「ギャラリー」の機能を果たしていたといえる。

以上の事柄を図式化すると、〈不思議な出来事→「奇跡」としての認知→奇跡集の出版・エクス・ヴォートの奉納→巡礼者の増加〉ということになる。ここで重要なのは、この図式が循環していくことである。奇跡を起こすとされる聖母マリアに関係する教会への巡礼者は、奇跡集やエクス・ヴォートにより、さらなる奇跡の可能性を信じることになる。そして、身の回りに起こった不思議な出来事が、聖母マリアによる「奇跡」として認識されるに至ると、奇跡の連鎖が生まれることになる。

結論

本稿では、西欧のカトリック社会におけるエクス・ヴォートの奉納習俗に着目し、聖母マリアの出現と奇跡、奇跡に対する感謝の奉納、そして巡礼地の形成、といった一連のプロセスを支えるメカニズムを考察し、総合化・図式化することをめざした。

まず、「聖母の出現」とそれによる奇跡として報告されてきた現象が、聖母マリアが神と人間とを「仲介」するものとするカトリックの公式見解とは別に、聖母マリアの奇跡を求め、直接的に「崇拝」しようとする人々の民衆的宗教性に根ざしていることを明らかにした。そこには、公式教義に対する人々の解釈から生まれた、公式教義からの「ずれ」がみられた。また、「聖母の出現」として語られる出来事は、当初は単なる「不思議な出来事」として体験されていたものが、やがて出来事を取り巻く人々のあいだで「聖母の出現」として認識され、ひとつのゆるぎない「事実」へと変化してくことを確認した。さらに、とりわけ近代の聖母出現とその広がりについて考える際、複製技術をはじめとする社会技術史上の諸発明にも着目する必要があることを指摘した。これは、本稿では十分な議論を展開できなかったが、宗教現象における「複製と増殖」というテーマとしてとりあげられるべきものである。加えて、聖母出現を核とする聖母崇拝の広がりには、「黒い聖母」崇拝の広がりが重要な役割を果たしたことも、再確認しておきたい。

さて、聖母によってもたらされたとする奇跡に対する感謝のしるしとして奉納されているのがエクス・ヴォートである。その奉納習俗は、キリスト教以前の奉納習俗を、キリスト教がうまく吸収したものといえる。エクス・ヴォートの図像表現から、人々が聖母マリアを直接的に崇拝していたことが確認できる。また、エクス・ヴォートが奉納された礼拝堂は、一種のギャラリーの役割を果たし、奉納されたエクス・ヴォートの数が多ければ多いほど、当該教会の霊験あらたかさをアピールするとともに、巡礼者の増加にも寄与したと考えられる。ドイツ・アルトエッティングの事例でもみたように、巡礼地を成立させ、多くの巡礼者をあつめるのに、エクス・ヴォートだけではなく奇跡譚をあつめた奇跡集が重要な宣伝メディアになった。

以上のように、民衆的宗教性としての聖母崇拝をもとに、人々の奇跡への渇望は聖母出現という出来事を生じさせ、そこには「不思議な出来事」を「聖母の出現と奇跡」としてとらえなおす集合的な認知のプロセスがあった。そして、一度「奇跡」として語られるようになると、奇跡への感謝のしるしとしてのエクス・ヴォートが奉納され、奇跡を宣伝する奇跡集とともに巡礼地の形成に寄与したといえる。

本稿では、エクス・ヴォートの奉納習俗を中核とする聖母崇拝の全体像を示すために、時代別あるいは地域別の聖母崇拝のありかたについて、十分な考察を加えることができなかった。とりわけ、中世から19世紀までの聖母出現と奉納習俗と、ルルドやファティマといっ

た、19 世紀から 20 世紀にかけてのそれは異なる可能性があり、慎重な議論が必要である。また、部分的に言及した日本の絵馬の奉納習俗と民衆的宗教性のありかたと西欧カトリック社会との比較研究については、今後の課題としたい。

1 本稿は、以下の二論文をもとにし、近年の研究成果を参照しながら、新たな視点を付加したものである。岩井洋「民俗／民衆宗教としてのエクス・ヴォート」『宗教研究』（日本宗教学会）290 号、1992 年、pp.31-46。同「祈りと感謝をめぐる宗教システム：宗教経営学の視点から」中牧弘允・日置弘一郎編『会社のなかの宗教：経営人類学の視点』東方出版、2009 年、pp.211-231。

2 山形孝夫『聖母マリア崇拝の謎：「見えない宗教」の人類学』河出書房新社、2010 年。クラウス・シュライナー（内藤道雄訳）『マリア：処女・母親・女主人』（叢書・ウニベルシタス）法政大学出版局、2011 年。

3 たとえば、渡邊昌美『中世の奇跡と幻想』（岩波新書）岩波書店、1989 年、秋山聰『聖遺物崇敬の心性史：西洋中世の聖性と造形』（講談社選書メチエ）講談社、2009 年、などを参照。

4 「民俗宗教」や「民衆宗教」のダイナミズムについては、岩井洋「〈民俗／民衆宗教〉への社会学的視座」『宗教研究』（日本宗教学会）325 号、2000 年、pp. 25-47、を参照。また、一般庶民が教義を読みかえて独特の世界像を生みだした事例を研究した、カルロ・ギンズブルグ（杉山光信訳）『チーズとうじ虫：16 世紀の一粉挽屋の世界像』みすず書房、2012 年、も参照。

5 Victor Turner & Edith Turner, *Image and Pilgrimage in Christian Culture*, NY: Columbia University Press, 1978. 関一敏『聖母の出現：近代フォーク・カトリシズム考』日本エディタースクール出版部、1993 年。シルヴィ・バルネイ（近藤真理訳）『マリアの出現』せりか書房、1996 年。藤原久仁子『「聖女」信仰の成立と「語り」に関する人類学的研究』すずさわ書店、2004 年。

6 National Geographic のウェブサイトには、過去 500 年間に聖母が出現したと報告された場所を世界地図上にマッピングした地図が公開されいる（http://news.nationalgeographic.com/2015/11/151113-virgin-mary-sightings-map）。神学者ローランタンは、2007 年に刊行された『聖母「出現」の事典』において、約 2,400 件の聖母の出現事例を紹介している。また、同書のイタリア語版では、さらに事例が追加され、約 2,600 件が紹介されている。René Laurentin & Patrick Sbalchiero（eds.）, *Dictionnaire des «Apparitions» de la Vierge Marie*, Paris: Fayard, 2007. René Laurentin & Patrick Sbalchiero（eds.）, *Dizionario delle "apparizioni" della Vergine Maria*, Roma: Edizioni Art, 2010.
久保田が日本の神の特徴を表現した「飛翔性」と「無限分割」という二つの言葉は、聖母の出現を考えるときにも示唆的である。前者は、いくら離れた場所でも、神が瞬時に降臨できる（と信じられている）ことをさし、後者は、勧請によって、無限に神の分霊・分身を移すことができることをさす。久保田展弘『日本多神教の風土』（PHP 新書）PHP 研究所、1997 年。

7 関、前掲書、pp. 162-215。

8 現象学的社会学における「現実」（reality）の概念が参考になる。アルフレット・シュッツ（森川眞規雄・浜日出夫訳）『現象学的社会学』紀伊国屋出版、1981 年。

9 関、前掲書、p. 26。

10 関、前掲書、pp. 152-153。

11 その後、ベルナデットは修道女となったが 35 歳で死去し、その遺体はフランス・ヌヴェールのサン・ジルダール（Saint Gildard）修道院に安置されている。遺体は、腐敗しないとされている。ベルナデットが聖母マリアのお告げで発見したとされる泉の水で、不治の病が治癒した例が多く報告されている。彼女は、のちに聖人となった。

12 René Laurentin, *Visages de Bernadette*, 2vols, Paris: P. Lethielleux, 1978.

13 関、前掲書、pp. 228-237。

14 関、前掲書、pp. 118-123。現在でも、同教会では小さなメダルを大量に袋詰めしたものが、土産物として売られている。

15 岩井洋「宗教の遠心力と求心力に関する試論」『宗教と社会』（宗教と社会」学会）9 号、2003 年、pp. 3-20、では、「自己複製」というアナロジーを用い、このテーマについて論じている。また、ベンヤミンの「アウラの喪失」に関する議論、すなわち、複製技術の発達が芸術作品のもつ「アウラ」（オーラ＝神

秘的な光）を喪失させたの説と、宗教における「複製と増殖」に関する議論を重ね合わせて考える必要がある。ヴァルター・ベンヤミン（浅井健二郎・久保哲司訳）「複製技術時代の芸術作品」『ベンヤミン・コレクション〈1〉近代の意味』（ちくま学芸文庫）筑摩書房、1995年。

16 柳宗玄『黒い聖母』福武書店、1986年。田中仁彦『黒マリアの謎』岩波書店、1993年。イアン・ベッグ（林睦子訳）『黒い聖母崇拝の博物誌』三交社、1994年。

17 一般に「ジプシー」の名称で知られ、学術的には「ロマ」（Roma）と呼ばれる移動生活者たちが崇拝する守護聖人サラも肌の色が黒い。サラは、マグダラのマリアらの従者とされ、南仏のサント・マリー・ド・ラ・メール（Saintes-Maries de la Mer）は、その聖地とされている。ロマについては、アンガス・フレーザー（水谷驍訳）『ジプシー：民族の歴史と文化』平凡社、2002年、および水谷驍『ジプシー：歴史・社会・文化』（平凡社新書）平凡社、2006年、を参照。

18 Ean Begg, *The Cult of the Black Virgin*, NY: London: Arkana, 1985. 地図と111ページにおよぶ地名事典（Gazetteer）は、日本語版（ベッグ、前掲書）では割愛されている。

19 山形、前掲書、pp. 162-201。山形は馬杉の説にも言及しているが、ここでは割愛する。馬杉宗男『黒い聖母と悪魔の謎』（講談社現代新書）講談社、1998年。

20 柳、前掲書。

21 田中、前掲書。

22 Frank Baer, *Votivetafel-Geschichten*, Augsburg: Rosenheimer Verlagshaus, 1976. Bernard Cousin, *EX-VOTO de Provice: Images de la Religion Populaire et de la Vie d'Autrefois*, Paris: Desclée de Brouwer, 1981. Bernard Cousin, *Le Miracle et le Quotidien: Le Ex-voto Provinçaux Images d'une Société*, Aix-en-Province: Sociétés, Mentalités, Cultures, 1983. Lenz Kriss-Rettenbeck, *Ex Voto: Zeichen Bild und Abbild im christlichen Votivbrauchtum*, Zurich: Atlantis, 1972. Lenz Kriss-Rettenbeck, Ex-voto, in Jane Turner (ed.) *The Dictionary of Art*, vol. 10, 1996, pp.701-702.

23 渡邊昌美「エクス・ヴォト」黒田日出男ほか編『歴史学事典』（第3巻　かたちとしるし）弘文堂、1995、pp. 96-97。

24 Ittai Weinryb, Introduction: Ex-Voto as Material Culture, in Ittai Weinryb (ed.) *Ex Voto: Votive Giving Across Cultures*, NY: Bard Graduate Center, 2016, pp. 1-22.

25 近年、モーガン（David Mogan）をはじめとした雑誌*Material Religion*を創刊した研究者たちは、従来の教義や思想に重点を置いた宗教研究に対して、教義や思想を支える物質的基盤に焦点をあてる研究を提唱した。その研究対象は多岐にわたり、衣服や食事といった身体と物質に関わる現象から、宗教に関わる芸術表現、宗教建築、さらには宗教の財政的基盤にまでいたる。*Material Religion: The Journal of Objects, Art and Belief* (Taylor & Francis) , 2005-.

26 水野千依『イメージの地層：ルネッサンスの図像文化における奇跡・分身・予言』名古屋大学出版会、2011年、p. 305。同書「第4節　エクス・ヴォート――死と蘇生の物神」（pp. 305-364）では、エクス・ヴォートに一節が割かれている。

27 アビ・ヴァールブルク「肖像芸術とフィレンツェの市民階級：サンタ・トリニタ聖堂のドミニコ・ギルランダイオ、ロレンツォ・デ・メディチとその一族の肖像」岡田温司訳『ヴァールブルク著作集2　フィレンツェ市民文化における古典世界』ありな書房、2004年、pp. 65-116。

28 Richard Andree, *Votive und Weihegaben des katholischen Volks in Sudddeutschland*, Braunschweig: F. Vieweg und Sohn, 1904.

29 Kriss-Rettenbeck, 1972, op. cit.

30 エマニュエル・ル＝ロワ＝ラデュリ／アンドレ・ビュルギエール監修（浜名優美ほか訳）叢書『アナール1929-2010　歴史の対象と方法』（全5巻）藤原書店、2010年～ 2017年。

31 David Freedberg, *The Power of Images: Studies in the History and Theory of Response*, Chicago: Chicago University Press, 1989. 特に、Chap. 7, The Votive Image: Invoking Favor and Giving Thanks, pp. 136-160. を参照。

32 松平俊久・蔵持不三也「民衆造形文化論：南仏マルセイユのノートル＝ダム・ド・ラ・ギャルド大聖堂におけるex-voto（奉納画）を事例として」伊東一郎・蔵持不三也・松平俊久『ヨーロッパ民衆文化の想像力：民話・叙事詩・祝祭・造形表現』言叢社、2013、pp. 119-237。

33 Weinryb (ed.) , op. cit.

34 Poul Cassar, Medical Votive Offering in Maltese Islands, *Journal of the Royal Anthropological Institute*, 94, 1964, pp. 22-29.
35 キリスト教以前のエトルリアとローマにおける奉納物については、Mario Tabanelli, *Gli Ex-voto Poliviscerali Etruschi e Romani, Firenze*: Leo S. Olshki, 1962. を参照。
36 水野、前掲書、p. 311。
37 水野、前掲書、pp. 312-322。
38 Cousin, 1981, op. cit. Freedberg, op. cit. ちなみに、スペイン人の入植とともに、メキシコにもエクス・ヴォートの奉納習俗が伝わり、「レタブロ」（retablo）と呼ばれ、独自の展開をしている。19世紀後半から、「ミラグレロ」（milagrero＝奇跡画家）や「レタブレロ」（retablero＝宗教画家）などと呼ばれる民衆画家によって描かれたレタブロが、一般民衆に浸透した。佐原みどり「心象世界としてのエクスボト：メキシコ女性の痛みの表現と死生観」『ラテンアメリカ研究年報』（日本ラテンアメリカ学　会）No. 24、2004年、pp. 43-80。なお、ブラジルのエクス・ヴォートについては、以下の文献を参照。Luis Beltrão, “O ex-voto como veículo jornalistíco,” *Revista Communicações & Problemas*, 1（1）, 1965, pp. 9-15. Luis Beltrão, *Comunicação e folklore: um estudo dos agentes e dos meios populares de informação de fatos e expressão de idéias*, São Paulo: Melhoramentos, 1971.
39 Wolfgang Jaeger, *Augenvotive*, Heidelberg: Jan Thorbecke Verlag, 1979.
40 Baer, op. cit., p. 14.
41 渡邊、前掲論文。
42 Kriss-Rettenbeck, 1972, op. cit., p.155.
43 Baer, op. cit. Cousin, 1981, op. cit.
44 告白と聖人崇拝は、キリスト教によって創り出された二つの安全弁だった、というヴァラニャックの指摘が想起される。A•ヴァラニャック＆C•ヴァラニャック（蔵持不三也訳）『ヨーロッパの庶民生活と伝承』白水社、1980年、pp. 123-124。
45 Clara Gallini, Photographische Riten: Popular Religion im Modern Italien, in Michael N. Eberz & Franz Schultheis（eds.）, *Volksfrömigkeit in Europa: Beiträge zur Soziologie popularer Relogiosität aus 14 Ländern*, München: Chr. Kaiser, 1986, pp. 226-235.
46 Cousin, 1983, op. cit., pp. 267-272, pp. 305-306.
47 Stephan Wilson（ed.）, *Saints and Their Cults: Studies in Religious Sociology, Folklore and History*, Cambridge: Cambridge University Press, 1983, pp. 243-250.
48 体系的な研究としては、岩井宏実『絵馬』法政大学出版局、1974年、がある。
49 Robert Bauer, *Bayerische Wallfahrt: Altötting*, München: Schnell & Steiner, 1970. Robert Bauer, Die Altöttinger Votivetafel, *Ostbairische Grenzmarken*, 13, 1971, pp. 176-183. ハンス•フェーン「アルトエッティングの巡礼地：アルトバイエルンの宗教地理学試論」M•シュヴィント編著（徳久球雄•吉田国臣訳）『宗教の空間構造』大明堂、1978年、pp. 90-101。
50 紫垣聡「Patrona Bavariae：近世バイエルンにおける宗教政策と聖母マリア崇敬」『パブリック・ヒストリー』（大阪大学西洋史学会）13、2016、p. 73。
51 フェーンによると、最初の奇跡の4年後の1493年に記録された、礼拝堂の献金管理記録の最古のものによると、12,375ポンドペニヒの収入が計上されている。当時、50kgの蝋が15ポンドペニヒであり、このことからも巨額の献金があったことがわかる。フェーン、前掲論文、p. 92。
52 紫垣、前掲論文、p. 73。
53 近年の医学史の研究では、このエクス・ヴォートを歴史的資料としてあつかい、けいれん発作が継続的・反復的におこり、意識が回復しない状態を示す「てんかん重積状態」（status epilepticus: SE）が記録された最古の史料として紹介されている。Wolf, P., Trinka, E., and Bauer, G., Absence status epilepticus: The first documented case? *Epilepsia*, 48（8）, 2007, pp. 4-5.
54 Bauer, op. cit., p. 63.
55 エクス・ヴォートの研究者でありアルトエッティングの巡礼管理者（Wallfahrtsadministrator）でもあるバウアー（Robert Bauer）氏に対して、1987年に行った筆者のインタビューによると、当時、約2,000点のエクス・ヴォートが奉納されており、定期的に架けかえが行われていたようである。
56 Freedberg, op. cit., p. 148.

57 ベーアによると、1693年より、おびただしい数のエクス・ヴォートを選別し、古いものを新しいものと交換し、絵画としての価値が比較的高いものを残してきたという。Baer, op. cit., p. 13.

58 Baer, op. cit., pp. 9-13.

59 アルトエッティングに関する最初の奇跡集は、1494年から翌年にかけて、アウグスブルクで印刷されたもので、25の奇跡譚が収録されていたという。Bauer, 1970, op. cit., p. 61.

60 日本においても、願掛けに関する「ガイドブック」が出版されていることは注目に値する。文化11年（1814年）、歌舞伎狂言作者である二世並木五瓶（萬壽亭正二）は『願懸重宝記』を著し、江戸における社寺のご利益や願かけの方法について記した。これを受け、文化13年（1816年）には、同じく歌舞伎狂言作者の浜松歌国が『神社仏閣願懸重宝記初篇』を著し、大坂におけるご利益や願かけについて伝えている。両『願懸重宝記』をみると、商売繁盛や開運祈願といったものよりも、様々な病気治癒に関する願かけが圧倒的に多いことがわかる。また、願かけ内容にあわせた、絵馬の奉納方法などについても記されている。